

キリスト教界は長い間、福音の中心は「義と認められて天国に入ること」だと考えてきた。しかし聖書は、「神の国で被造物の管理権を活用すること」だと説いている。すると、神学のパラダイムシフトが起こらねばならない。新しい「被造物管理の神学」は、キリスト者の歩みを一変してしまう神学である。本資料は、2012年秋に大野キリスト教会の教育セミナーで語られた講演原稿を修正加筆したものである。(2013年11月)

現代のキリスト教はパラダイムシフトが必要である

「天国行き」から「被造物管理」の福音理解に転換する

ごあいさつ

本日は、この会堂における最後の「教育セミナー」となりました。これまで一緒に礼拝をささげてきた教会堂は来月には取り壊されます。一年後には新しい教会堂で礼拝をささげることになります。これまでの歩みを振り返りますと、感慨深いものがあります。その思い出を大切にしながらも、私たちの思いは、自然新会堂に向かいます。夢と希望を大きくもって、神様に期待してまいりましょう。

今日の講演のテーマは「現代のキリスト教はパラダイムシフトが必要である」です。何となく難しそうなテーマだと思われるかもしれませんが、決してそうではなく、できるだけ分かりやすく、楽しく話します。他では聞くことのできない大切な話をしますので、期待をもってお聞きいただきたいと思います。

1. 宗教の世界におけるパラダイムシフトとは

この講演のタイトルの主語を「現代のキリスト教は」とさせていただきます。この言葉は、カトリックからカリスマまで、すべての教会とキリスト者を含めています。私は、カトリック、ギリシャ正教、プロテスタントの主流派から福音派、そしてカリスマまで、すべての教派に生まれ変わった真のクリスチャンがいると信じています。彼らは、キリストの贖いを通して罪を赦された人々であり、神の御霊を受けています。そのようなすべてのクリスチャンの方々にこの講演を聞いていただきたいと願っています。神学のパラダイムシフトは、どのような教会に属しているキリスト者であっても必要なものだと確信しているからです。

タイトルの述部は「パラダイムシフトが必要である」です。「パラダイムシフト」という言葉は、最近いろいろなところで使われるようになりました。一種の流行語にさえ、なりつつあります。もともとこの語は、科学史研究者トーマス・クーンが使った言葉です。それは、一つの思考の枠組みから別の思考の枠組みへと転換することを意味します。従来の枠組みの中で研究を進めていくと、その枠内ではどうしても説明できない現象やデータが出てくる場合があります。どのようにつつま合わせをしても、部分的な修正を試みても、とても間に合わない、認知的不協和を起こしてしまう現象です。小さな発見や部分的な修正などの矛盾に対しては、この言葉は使われません。従来の思考の枠組みからはみ出た、もっと根源的で大きなデータが、新しい枠組みの中にぴったり当てはまるとき、パラダイムシフトという言葉が使われます。例えば、天動説から地動説へのパラダイムシフト、あるいはニュートンの力学からアインシュタインの相対性理論へのパラダイムシフト、というように。

「パラダイムシフト」という言葉は、もともと自然科学の発展史の分野で使われました。ところが、似たような状況が他の世界でも起こります。その結果、いろいろな所でこの言葉が流行るようになりました。そして最近では、宗教の世界でもよく使われるようになってきました。宗教の世界のパラダイムシフトは、厳密に言いますと、科学史におけるそれとは違います。科学は「疑うこと」から出発します。ところが、宗教は「信じること」から始まります。科学は、真理は必ず存在するという前提に立ち、すべてを論理的に考えます。仮説、実験、検証作業を繰り返し、反証事項のすべてに説明がつけば、その仮説は真理であると見なされます。ところが宗教は、「エイ・ヤー」と飛び込む世界です。人間の思考力や論理力が初めから届かない世界を相手にしています。この違いは当然、パラダイムシフトの起こり方に大きな影響を与えます。

この講演では、キリスト教神学の分野におけるパラダイムシフトを問題にします。では、従来のパラダイムの正統

派神学において認知的不協和を起こすような問題にはどのようなものがあるでしょうか。それは、たくさんあります。まず、ヘブル人への手紙 2 章のメッセージが無視されていること、自然災害の出来事、イエスの神の国の位置づけ、宗教と科学の対立、エキュメニズムの崩壊現象、キリスト者の地上の生活における意味の喪失、などなどです。

例えば、自然災害の問題を取り上げてみましょう、この問題は、従来の神学では「悪」の問題、あるいは「神の義」の問題として扱われてきました。つまり、人間の罪が自然災害をもたらすと考えたわけです。するとその帰着点は「神の裁き」ということになります。自然災害を神の裁きと言い切れるなら、パラダイムシフトは必要ありません。従来の神学で間に合うことになるからです。実際、関東大震災のときには、日本のキリスト教指導者たちは「神の裁き」として受け止めました。そこでは、認知的不協和は起こらなかったのです。

自然災害を神の裁きと受け止めることに対し、日本の教会が大きな疑問を投げかけたのは、阪神大震災のときでした。その時には、神の裁きを主張したキリスト教指導者はほとんどいませんでした。というより、その時はオウム事件もあり、20 世紀最後の終末意識の強い時期でしたから、神学的な問いを深める余裕などありませんでした。しかし、東日本大震災の状況は違っていました。ローマ法王も一人の少女に「神様がなぜ東日本大震災を起こされたのかは分からない」と答えられたと新聞は報じていました。多くの牧師や神学者が「不可解」という言葉を使いました。この「不可解」という言葉こそ、パラダイムシフトが要請されていることを意味します。

2. 信仰と教理と神学は区別しなければならない

この講演では、神学におけるパラダイムシフトという問題を扱おうとしています。しかしその前に、私は、「信仰」と「教理」と「神学」の三つの言葉を区別した方がよい、と考えております。実は、従来のキリスト教神学では、この三つの言葉を区別せず、ほとんど同じニュアンスで使ってきました。特に福音派は「聖書信仰」を旗印に宣教活動と教会(教派)形成に励んできました。その結果、信仰＝聖書(神の啓示)、教理＝聖書(神の啓示)、神学＝聖書(神の啓示)という考えが定着しました。つまり、聖書を媒介として、信仰＝教理＝神学と考えたのです。つまり、信仰も、教理も、神学も、聖書の啓示と同じでなければならず、これらを区別することは、聖書信仰から離れることだったのです。

信仰、教理、神学のいずれも、大なり小なり人間の理性が関わっています。従って、三つを同一視してしまったことは理解できないことではありません。しかし、この三つを同一視した弊害も大きかったと言わねばなりません。もし三つを的確に区別することができたなら、世界中のどの教派のクリスチャンも、正統派意識を卒業することができたでしょう。そうすれば、教派間の違いを乗り越え、神の国のために協働する基礎ができたはずです。このようにして、エキュメニズム運動は大きく進展し、この世界に大きな証ができたと思います。むしろ、このような考え方が整理できれば、問題は直ちに解決する、などと申し上げているわけではありません。

では、信仰、教理、神学の三つをどのように区別するとよいのでしょうか。これまで私が考えてきたことを、今日は提案させていただきます。このような整理方法は、他の神学者の誰かが述べているわけではありません。本日提唱している新しいパラダイムの一つの重要なポイントになろうかと思えます。簡単に説明しておきましょう。

まず「信仰」です。信仰とは、「信じ仰ぐ」ことです。キリスト者は、三位一体の神を信じますとか、キリストを信じますと告白します。信仰とは、神との関わりです。むしろここでも、神とは誰か、関わりとは何か、という知的な問題が絡んできます。しかしキリスト者の間では、聖書とそれぞれが受けているキリスト教の伝統から、三位一体の神を信じるという実体験に関しては、およそのコンセンサスがあります。このことがとても重要です。細かな点は、次の教理とか神学の分野で議論すればよいのです。宗教である限り、既にあるコンセンサスを基盤に出発するのです。

「教理」は、聖書の教えを知的に体系化したものです。すべてのキリスト者は、この教理を信じています。しかし、この教理は、それぞれの教会や教派によって異なります。そのことは、それぞれの教派が大切にしている信仰告白、信条集、教理問答集などを見れば明らかです。この教理は、信仰とは違い、時代や場所、歴史的な背景、文化的な流れ、信仰的伝統などの影響を大きく受けます。カトリックの世界、ルター派や改革派、イギリス国教会やバプテスト、メソジストやカリスマ派、それぞれの教派は皆、特色豊かな教理を継承しています。信仰は全世界のクリスチャンの間にコンセンサスがあります。教理に関しては、それぞれの教派のレベルにおいてコンセンサスが

得られている、と言ってよいでしょう。

最後に「神学」です。もう30年以上も前のことです。福音派の代表的な神学者ケネス・カンツァーは、「百人のキリスト者がいれば、百通りの神学がある。神学とは、キリスト者各自がもつものである」と言われました。私はそのとき通訳をしていたのですが、一瞬自分の思考回路が止まり、そのことが気になり始めた、という記憶があります。以来、同じ教会に属していても、一人一人のキリスト者はずいぶん違う考え方、生き方、価値観や世界観をもっているなあ、と気づきました。それは、それぞれのOSが違うのですから当然と言えば、当然のことです。神は個性豊かな人間をお造りになりました。神学の世界では、その一人一人の個性が豊かに発揮される場所なのです。

「神学」は、信仰や教理より、さらに幅広い問題に関わります。キリスト者が生きていく中でぶつかる問題のすべてが神学には反映されます。聖書や教会内のことに限らず、一般社会で出くわすすべての問題が神学的なテーマになるのです。その課題を、聖書に基づきながら、自分の理性を最大限に活用して論理的・体系的に展開させていくのが神学です。この神学は、信仰と教理から切り離すことはできません。といっても、同じではありません。

信仰は、絶対的で変わりません。教理は、教会(あるいは教派)レベルでスタンダードなものがあります。しかし、神学になりますと、キリスト者個人によって大きな違いがあります。これまでの福音派の最大の問題点は、信仰と教理と神学を区別しなかったことにありました。その結果、自分と違う教理の教会(教派)を対立的にとらえたり、ちょっと変わった神学をもっているキリスト者をおかしな信仰者と決めつけるようなところがありました。これが、従来のパラダイムがもたらした悲劇でした。こういう状況から一刻も早く抜け出すことが、私たちに求められているのです。

皆様、お分かりいただけただけでしょうか。「パラダイムシフト」が起こるのは、信仰の世界でも、教理の世界でもありません。神学の分野においてです。信仰の世界で変わる場合には、異端に走ることであり、異教に転向することと見なされます。それは許されるものではありません。教理の分野で変わると、教派から除名されるとか、教派を脱退するというようなことが生じます。福音派には、違いを危険視せず、豊かさにとらえる成熟さが求められています。

3. 神学のパラダイムシフトの歴史

では、神学の世界ではこれまで、パラダイムシフトは頻繁に起こったのでしょうか。そう多くはありません。しかし、少なくともこれまでに、六つのパラダイムシフトが起こったと考えてよいのではないかと思います。一通り、見ておくことにしましょう。

最初は、2世紀初頭の「素朴な福音理解からギリシャ哲学へ」というパラダイムシフトです。教会史も、2世紀になりますと、キリスト教信仰は、ギリシャのグノーシス主義哲学に脅かされました。それに対しギリシャ教父たちは、同じグノーシス主義哲学を用いてキリスト教信仰を弁証し始めました。それは、新約聖書をそのまま受け止めることから、受肉を強調するキリスト論、経綸的三位一体論、モンタヌス運動を抑制する聖霊論などが発展しました。今日注目されている東方のギリシャ教父たちの神学もこのパラダイムに属すと考えてよいでしょう。

二番目は、4世紀から5世紀にかけての「ギリシャ教父神学からアウグスティヌス神学へ」というパラダイムシフトです。正統派神学の父と言われるアウグスティヌスは、新プラトン主義哲学を駆使し、三位一体論、人間論、墮落論、神の国論など、広範囲な神学的議論を展開しました。現在のキリスト教正統派神学は、カトリック、ギリシャ正教、プロテスタントを問わず、アウグスティヌスの神学を源流としています。

三番目のパラダイムシフトは、13世紀のトーマス・アクイナスによる「アリストテレス論理学に基づくスコラ神学の確立」です。12世紀から13世紀にかけ、カトリック教会の中にはさまざまな神学的運動が起こりました。そのような中で、アクイナスはいろいろな考えを集大成し、『神学大全』という大著を著しました。これは、カトリック神学の金字塔と見なされ、今日でもカトリックの教理の根幹になっています。このたび、全45巻39冊の日本語訳が52年の歳月を経て完成しましたので、今は日本語で読むことができます。図書館にでも行き、一度さらっとでもご覧ください。スコラ哲学の論理展開に慣れてきますと、意外とスコラ神学の面白みにはまるかもしれません。

四番目のパラダイムシフトは、「スコラ神学から宗教改革の神学へ」です。ルターは「信仰義認」の教理を高く掲げて聖書の翻訳に励み、『キリスト者の自由』など多数の書物を著しました。カルヴァンもまた多数の聖書註解書を著し、さらに『キリスト教綱要』という書物を通して宗教改革の神学を鮮明にしました。宗教改革者たちは、ローマ

法王の権威に対して「聖書のみ権威」、カトリックの善行による救いに対し「信仰のみによる救い」、権威的・階層的な教職性に対して「万人祭司主義」を打ち立て、聖書に帰る運動を展開したのです。

五番目のパラダイムシフトは、17世紀から18世紀にかけて最盛期を迎える「プロテスタント正統派神学への転換」です。宗教改革の神学は、信仰の基本を強調し、聖書のダイナミズムに生きることを説いていました。ところがその後続くプロテスタント正統派神学は、聖書を文字通りに解釈し、微に入り細に入り綿密なキリスト教の教理体系を打ち立てるようになりました。彼らは啓蒙主義などの合理的懐疑主義に強く反対し、保守的・護教的な神学を展開しました。その結果、プロテスタント神学のスコラ的体系への逆戻りという様相を呈することになりました。それは、19世紀から20世紀にかけてのキリスト教根本主義の流れを生み出す基盤となっていくのです。その結果、他の人々のわずかな違いさえ容認できず、分離に分離を重ねる、原理主義の悲劇を味わうこととなります。

六番目は、20世紀初頭に台頭する「新正統主義神学と福音主義神学」です。先の根本主義運動は、結局自らの神学体系を絶対化するようになりまし。そういう流れの中で、プロテスタント主流派の教会は、バルト神学を中心とした新正統主義神学を掲げ、教派形成に向かいました。彼らは、自由主義と根本主義の両方を拒否し、自然神学をも否定しました。その傾向は、今日のプロテスタント主流派の中に今も脈打っています。

根本主義の克服は、新正統主義神学とは別に「福音主義神学」として起こりました。彼らは聖書の高等批評学を受容するバルト神学に反発します。その後、聖書信仰を標榜し、1950年代の「聖書批評学論争」、70年代の「聖書の無誤性論争」、80年代の「カルスマ派論争」、90年代後半からの「オープンセイズム論争」などを通じ、さらにさまざまな宣教会議を開催してプロテスタント福音派のグループ形成に努めてきました。

4. 何から何へのパラダイムシフトなのか

これまで、教会史上に起こった六つの「キリスト教神学のパラダイムシフト」を概観してきました。そして本日、私は教会史上七番目のパラダイムシフトを提唱しようという思いで、講演させていただいているわけです。では、この七番目のパラダイムシフトは、何から何に変換するのでしょうか。

ひと言で言えば、「信仰義認」から「被造物管理権の回復」です。これまでのパラダイムは、「イエスの贖いとは、信仰によって義と認められ、天国に行くことができる」というものでした。このことを明らかにしている中心的な聖書箇所は、ローマ3章21-26節です。新しいパラダイムとは「イエスの贖いとは、墮落によって失われた人間の被造物管理権が回復されている」というものです。中心的な聖書箇所はヘブル2章6-13節です。両方の聖書本文を紹介しておきます。まず、ローマ3章21-26節です。

しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。(ローマ3:21-26)

次に、ヘブル人への手紙2章6-13節です。

むしろ、ある個所で、ある人がこうあかししています。

「人間が何者だというので、これをみこころに留められるのでしょう。

人の子が何者だというので、これを顧みられるのでしょう。

あなたは、彼を、御使いよりも、しばらくの間、低いものとし、彼に栄光と誉れの冠を与え、万物をその足の下に従わせられました。」

万物を彼に従わせたとき、神は、彼に従わないものを何一つ残されなかったのです。それなのに、今でもなお、私たちはすべてのものが人間に従わせられているのを見てはいません。ただ、御使いよりも、しばらくの間、低くされた方であるイエスのことは見えています。イエスは、死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠をお受けになりました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされたということは、万物の存在の目

的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであったのです。

聖とする方も、聖とされる者たちも、すべて元は一つです。それで、主は彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、こう言われます。「わたしは御名を、わたしの兄弟たちに告げよう。教会の中で、わたしはあなたを賛美しよう。」またさらに、「わたしは彼に信頼する。」またさらに、「見よ、わたしと、神がわたしに賜った子たちは。」と言われます。(ヘブル 2:6-13)

ヘブル 2 章については、この小冊子の最初の講演、「ヘブル人への手紙 2 章 6-13 節の解釈」をお読みいただきたいと思います。ここでは、その部分をお読みいただけるものと信じ、説明を省かせていただきます。また、ローマ 3 章の「信仰義認」は福音の中心的なメッセージです。おそらく皆様は、耳にタコができるほど聞いてこられたことでしょう。というわけで、「信仰義認」から「被造物管理」へのパラダイムシフトの内容については、これ以上説明する必要はないと思います。

ただ、このパラダイムシフトについて、三つの補足説明をしておく必要があると感じております。

その一つは、従来のパラダイムで語られてきた信仰義認は、もはや不要になった、無効になった、真理でなくなった、などと申し上げているわけではありません。パラダイムシフトとは、ものを考える枠組みが転換するということです。パラダイムの中身の価値が変わるわけではありません。むしろ価値が変わるのは、新パラダイムの人間の被造物管理権の回復の方です。これは、従来のパラダイムにはなく、新パラダイムで初めて登場するものです。

二つ目は、「被造物の管理権の回復」に似た考え方は、教会史、上他にもあった、ということです。例えば、カトリックの「自然法」、プロテスタントの「一般恩寵」、啓蒙主義思想の「自然神学」、改革派神学の「領域主権」、プロテスタント主流派の「社会的責任」、そしてケープタウン決意表明の「包括的福音」、などです。従来のパラダイムの中で語られてきたこれらの考え方の中には、新パラダイムの「被造物の管理権の回復」に一部共通したものがあります。しかし、「被造物の管理権」の方は、次のような一連の流れを含んだものです。一部類似した点があるからといって、同じ事柄だと推定するのは間違いです。

その一連の流れとは、①神は、万物の創造以前からキリスト者を「キリストとの共同相続人」に選ばれた、②神がキリスト者を神の子に召された理由は、「神の相続権を付与することにあつた」、③キリスト者は「王」とか「祭司」と呼ばれる「極めて高い位置に置かれている」、④現在キリスト者が管理している全宇宙は、(ローマ 8 章の被造物の贖いという教えから)新天新地と何らかの関係があるのかもしれない、⑤キリスト者に対する終末の裁きは、「キリスト者が被造物の管理権の中で行使していること」に深い関係がある、⑥この世界は、人間の墮落により大きな破れが生じているが、それでもキリストの主権は一切のものの上に及んでいる、などです。

三つ目は、最近よく話題になる新しい救済論理解と、新パラダイムの被造物管理の神学とは、一部似ているところはありますが、大きな違いがあります。新しい救済論とは、神の救いは単に墮落した人間の贖いだけでなく、全被造物の贖いも含まれるというものです。そのような救済論は、ローマ 8 章 19-25 節に基づくもので、従来のパラダイムの神学においても昔から語られてきました。ただ現実の教会では、キリストの贖い＝人間の贖い、として語られるだけで、全被造物の贖いにまでは及んでいなかったことは事実です。

しかし問題は別のところにあります。この全被造物の贖いはいつから開始されるのか、ということです。従来のパラダイムでは、被造物の贖いは未来の人間の現れの時の話なので(ローマ 8:19-22)、未来の出来事であると理解されてきました。新パラダイムの被造物管理の神学においては、キリスト者の贖いは、今の地上の歩みの中で既に始まっています。同じように、全被造物の贖いも、キリストによる支配とキリスト者による管理によって既に始まっている、そう理解するわけです。ここでは、今の天地が贖いを待っていて、人間と共に苦しんでいると言われているので、新天新地は、今の天地の延長線上にあることは明らかです。そこから、キリスト者が今の自然を管理するという発想が出てくるわけです。

5. 「神の国」の相続人と統治原理

信仰義認では、天国に入ることが中心的な関心事でした。ところが、被造物管理の神学では、御国を相続することが中心となります。キリスト者とは、「神の子」になることです。神の子になるとは、「御霊をいただくこと」です。御霊をいただくとは、「相続人になること」でした。

神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。…もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たち

がキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人です。(ローマ 8:14-17)。

これは律法の下にある者を贖い出すため、その結果、私たちが子としての身分を受けようになるためです。そして、あなたがたは子であるゆえに、神は「アバ、父」と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました。ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子ならば、神による相続人です。(ガラテヤ 4:5-7)

キリスト者が神の相続財産を受け継ぐことは、新約聖書の中心的なメッセージです。しかも、それは「信仰義認」がもたらす最も大切なものです。ところがこれまでキリスト者は、信仰義認を「天国に入る条件」とだけ理解してきました。しかし、新約聖書は別のことを教えています。信仰義認は御国を相続させる、そう教えているのです。

というのは、世界の相続人となるという約束が、アブラハムに、あるいはまた、その子孫に与えられたのは、律法によってではなく、信仰の義によったからです。(ローマ 4:13)

そのようなわけで、世界の相続人となることは、信仰によるのです。それは、恵みによるためであり、こうして約束がすべての子孫に、すなわち、律法を持っている人々にだけでなく、アブラハムの信仰にならう人々にも保証されるためなのです。(ローマ 4:16)

あなたがたは、主から報いとして、御国を相続させていただくことを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです。(コロサイ 3:14)

神は、この聖霊を、私たちの救い主なるイエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。それは、私たちがキリストの恵みによって義と認められ、永遠のいのちの望みによって、相続人となるためです。(テトス 3:6-7)

よく聞きなさい。愛する兄弟たち。神は、この世の貧しい人々を選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束されている御国を相続する者とされたではありませんか。(ヤコブ 2:5)

「天国に入る」と、「御国を相続する」との間には、雲泥の差があります。まず、「天国」とは、死んでから後に行く世界のことで、しかし、「御国」とは、イエスが語られた「神の国」のことで、それは、イエスが死と復活を通して「王として」支配し始めたことを言い、今この地上に存在しています。そして、それはやがて再臨の時に完成されます。さらに、「入る」とはメンバーになることですが、「相続する」とは所有権・管理権をもつことで、全然意味が違います。新約聖書は、キリスト者に対し「王」とか「祭司」という、驚くべきタイトルを使っています。

しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。(I ペテロ 2:9)

私たちが王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。(黙示録 1:6)

私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。(黙示録 5:10)

彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。(黙示録 20:6)

彼らは永遠に王である。(黙示録 22:5)

「王」の職務も、「祭司」の仕事も、現代のキリスト者にとっては無縁なものです。従って、その真の意味を把握するのは難しいでしょう。それにもかかわらず、この宇宙で最高位の職務であることは、何となく感じていただけたと思います。贖われたキリスト者は、今のこの地上において、神のご支配の中で神との協働統治をする、それが「王」の意味です。また、「祭司」とは、神と被造物の間に立って、被造物のためにとりなしの祈りをささげることです。この祈りは、被造物の管理そのものなのです。キリスト者は、想像もできないほどすばらしい働きに召されています。キリスト者が自信と誇りをもってその使命に生きていくのは、あまりに当然のことではないでしょうか。

ここで、どうしても知っておかねばならない大切なことがあります。キリスト者が神との協働統治を果たすにあたり不可欠なことがあります。「神の国の統治原理」です。この原理を身に着けない限り、その任を全うすることはできません。もし違う原理で管理を始めるなら、それは神との協働統治になりません。では、その神の統治原理とはどのようなものでしょうか。それについてイエスは、明確に教えておられます。

そこで、イエスは彼らと呼び寄せて、言われた。「あなたがたも知っているとおりの、異邦人の支配者たちは彼らを支配し、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるため

あり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」(マタイ 20:25-28)

一般社会では、それがどのような組織体であっても、上に立つ人ほど権威と権力を持ち、下の人をコントロールします。ところが、「神の国」においては全く逆です。上に立つ者は「仕える者」です。これまで、被造物に対し、「管理」とか「統治」とか「支配」という言葉を使ってきました。しかし、キリスト者が被造物に接するときの基本的な態度は、「仕える」ということにあります。あるいは、「お世話する」とか、「配慮する」といってもよいでしょう。このことをきちんと踏まないと、「被造物の管理」と言われても、具体的に何をすればよいのかが見えてきません。

パウロは、「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです」(ピリピ 2:3-5)と述べた後、キリストの生涯とその結末を「キリスト者が見習うべき模範」として提示しました。

キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。(ピリピ 2:6-8)

ピリピ 2 章 6-11 節のキリストに関する記述は、韻を踏んだとても美しい文章です。初代教会の讃美歌集から引用されたと言われています。もしそうだとすれば、初代教会のキリスト者たちは、キリストの謙遜な歩みを日々賛美し、その生き方に倣って毎日の生活を送っていたこととなります。キリストの統治とは、「自らをむなしくすること」、「仕えること」、「しもべになること」を通して得られたものでした。キリスト者にとって、他の道はあり得ません。

イエスは、最後の晩餐の夜、弟子たちの足を洗われました。そしてその後、「主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです」(ヨハネ 13:14-15)と言われました。被造物管理権を託されたキリスト者は、このようなイエスの御跡を歩んでいくのです。

6. パラダイムシフトの結果、神学はどのように変わるのか

私はこの講演で、信仰義認の神学から被造物管理の神学へとパラダイムにシフトすることを提唱してきました。では、もしパラダイムシフトをしたなら、現代のキリスト教に、どのような変化が生ずるのでしょうか。このことはとても大切なことです。ここでは神学の側面に関し簡単にふれておきます。今年の 9 月に予定しています次の教育セミナーでは、キリスト者生活に起こる具体的な変化について詳しく取り上げます。楽しみにお待ちください。

その第一は、聖俗二元論がなくなります。従来神学は、聖書が述べている事項のみを扱ってきました。しかし、新パラダイムでは被造物に関わるすべてのことが取り扱われます。そこでは、聖なる世界と俗なる世界とを分けることはしません。キリスト者にとっては、「すべてのことは聖いのです」(ローマ 14:20)。キリストは一切の被造物の主です。とすれば、キリストとの共同管理者であるキリスト者もまた、すべてのものを管理する責務を託されているのです。被造物のすべてを聖なるものとされたのが、キリストの贖いでした。

二番目は、これまでのパラダイムでは、自分たちのキリスト教神学を「絶対的客観的真理」と見なしてきました。特に、カトリックとプロテスタント福音派においては、その傾向は強いものでした。しかしそれは幻想にすぎません。いつの時代であっても変わらない「絶対的な真理」は、聖書の「福音」だけです。それは、信ずべきものです。神学は、時、場所、人によって変わります。それは「相対的主観的な真理」に過ぎません(ピリピ 3:15-16)。このへんでキリスト者は、神学やライフスタイル、世界観や価値観の違いで裁き合うことはやめたいものです。守らなければならないものを守り、こだわらべきでないことにはこだわりを捨てる、この勇気をもちましょう。境界線思考を捨て、中心点思考に生きましょう。

第三に、従来パラダイムでは、「人間の墮落性・罪性」が強調されました。そこから解放されることが福音であったにもかかわらず、贖われたキリスト者の位置は依然として低いままでした。「罪赦された罪人」というのが、旧パラダイムのキリスト者理解でした。その結果、キリスト者は、自分やこの世界に対し、否定的・消極的な評価をする傾向から抜け出ることができませんでした。聖化を強調し、霊性を重んじることは大切です。しかし、罪を犯さない

ようにとか、自我が出ないようにとか、動機は純粹だろうかなどと神経症的なキリスト者生活を送っている人が何と多いことでしょう。しかし、新パラダイムにおける神の人間に対する見方は全く異なります。神は、被造物の管理権を人間に回復し、協働管理者としての使命をキリスト者に託されました。その職務は本来神に属し、「栄光と誉の冠」と呼ばれるものでした(ヘブル 2:7, 9)。従って、キリスト者は「王」とか「祭司」と呼ばれているのです。

第四は、これまでのパラダイムでは「キリストの死と贖罪」が重要視されてきました。しかし、新しいパラダイムでは、「キリストの復活と被造物の支配」に強調点が置かれます。十字架のキリストが重要なことは言うまでもありません。しかし、それは原点であり、土台です。復活の、勝利の、そして栄光の統治者キリストこそ、私たちが日々仰いでいるお方です。原点を振り返ることは時に必要です。しかし、ゴールを目指して走りぬくことの方が、キリスト者にとってはるかに大切です(ヘブル 12:2)。

五番目は、パウロの教会論よりイエスの神の国がより重要になります。教会は神の国の一部に過ぎません。これまでのパラダイムでは、神の国についてはほとんど語られませんでした。キリスト者は、教会中心の内向な生き方をしてきました。新しいパラダイムでは違います。キリスト者は教会を基盤にしつつも、そこに留まらず、神の国の広がりの中で与えられた使命を果たしていきます。ギリシャ語「神の国」の直訳は「神の王国」であり、その意味は「神が王として支配している」です。キリスト者は、全被造物を統治しているキリストとともに、「王」あるいは「祭司」として管理責任を果たしていくのです(I ペテロ 2:9)。

六番目は、これまでのパラダイムの神学では、今の宇宙・被造物は終末と共に滅びる無意味な存在と考えられてきました(II ペテロ 3:5-13 参照)。しかしパウロは、被造物の贖いについても言及しています(ローマ 8:18-25 参照)。現在の宇宙が、来たるべき新天新地とどのような関係にあるのか、今ははっきりしません。人は地上の生涯を終わったとき、復活の体をいただきます(I コリント 15:)。しかしその復活の体がどのようなものであるのか、今は分かりません。同様に、今の天地と来たるべき新天新地との関係は、あまりよくは分かりません。それがどのような関係であるにしても、キリスト者は全被造物の贖いを信じ、キリストと共に管理してまいりましょう。

結論

これまで、「信仰義認の神学から被造物管理の神学へのパラダイムシフト」について講演してきました。「被造物の管理」などという、「自然界を管理する」という大きな事柄のように聞こえるかもしれませんが。しかし実際には、日々の小さな出来事から始めるものです。パウロは、キリスト者の生活についてこんな風に述べています。「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。」(I コリント 10:31)。あるいは、「あなたがたのすることは、ことばによると行ないによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。」(コロサイ 3:17)

パラダイムが変わったからと言って、明日からの生活が全く変わってしまう、というようなものではありません。むしろ、今までの生活がそのまま続きます。仕事も、家庭も、友人も、家計も、隣近所も、教会の奉仕も、その他何もかも、特別変わることはないでしょう。しかし、たとえ同じことをするにしても、新しいパラダイムに生きる時、すべてが違った意味を持てきます。それは、「管理する」という視点から考えるようになるからです。ペテロは、キリスト者の生活についてこう述べています。「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」(I ペテロ 4:10)

神は、私たちに賜物を与え、今私たちが置かれているところに置いてくださいました。そこは私たちにとって最善の場所として、特別用意してくださったものです。それゆえ、私たちの身の周りに起こるすべてのことに対処することが私たちに託された「被造物管理」の仕事です。まず、そのことを無条件で受け止めましょう。しかも、神が一つ一つの中に働いて、すべてを益としてくださると信じましょう。そして、これからの展開と結末を聖霊の働きに委ねましょう。委ねつつ、なお神の御心を伺い、神の助けを祈りましょう。その上で、自分がなすべきだと感じたことを、ベストを尽くして行ってみましょう。そのような歩みに一歩踏み出すとき、神が先頭に立って働いておられることを実感するでしょう。

もしこのような生き方を日々身に着けていくなれば、神が期待されているよき協働管理者として成長していくことでしょう。そのような歩みの中で、神が共にいてくださり、神が栄光を表わしてくださり、神が喜んでくださっていることを味わうことになるでしょう。そして神は、さらに大きな管理の責任を私たちに託されることでしょう。